

「旅するムサビ」がしてきたこと

三澤 一実

(美術科教育学会・武蔵野美術大学)

旅するムサビとは

「旅するムサビ」は武蔵野美術大学の学生が自作品を持参して小中学校や高校、美術館などを訪れ、子どもたちと対話をしながら持参した作品を鑑賞する取り組みである。

今日、学校教育では図工・美術の時間が減り、以前に比べ図工・美術の授業はダイナミズムを失い萎縮してきているように思えてならない。そのような学校の授業に学生がゲストティーチャーとして参加し、子どもたちの造形体験を豊かにしていく取り組みである。同時に学生自身も自分の作品を見てもらい、作品批評を得て貴重な意見を聞く事ができる。教師も対話を通じた鑑賞活動の実際を見る事ができ授業づくりの参考になる。

旅するムサビは、この対話型鑑賞授業を活動の核にしながら、ワークショップの実施や黒板ジャック、共同制作、夏休みの学校を美術館にする取り組みなどを全国各地で展開してきた。その数は7年間で21都道府県と海外で120回を超えた。

なぜ旅するムサビ？

美術作品は教科書や画集に載っているだけでは余りにも実感がなさ過ぎる。「旅するムサビ」を始めたきっかけは、ある中学校の美術の先生からの「子どもたちに印刷物ではなく本物を見せたい」との相談であった。「それでは学生の作品を持って中学校に行きましょう」と、学生5名と美術の授業に乗り込んだ。そのときの学生作品を見る生徒の真剣な表情。学生の緊張した面持ち、必死に話す姿。それがこの活動のスタートである。美術の面白さは体験でしか伝わらない。感動を共にしないとその魅力は理解できないのである。

美術は、美術館や画集に掲載されているものだけではなく、もっと身近に私たちの身の周りに溢れていなくてはならない。いや、溢れているが気付かないだけなのである。それを旅するムサビを通して子どもたちに気づかせていけるのである。

ある日突然、黒板ジャック

黒板ジャックは旅するムサビの企画の中で学生が考え出したユニークな取り組みだ。黒板は学校で授業に使用し落書きはしてはならない。しかし、表現したい者たちにとっては、それは大きなキャンバスである。日常に在るあたりまえを美術の視点から捉えてみると、全く異なる魅力的な存在に映るのである。

日曜日、合法的に学校に忍び込み、児童生徒に気づかれないように黒板一面にチョークで絵を描く。月曜になにも知らずに登校してきた児童生徒は、突然現れた黒板一面の作品を見

て、驚き、戸惑う。そして、学校の全教室に描かれているこの企みに気づき、友だちと全教室を巡り始める。月曜の朝から学校全体が騒然となっていく。しかしその騒ぎも朝の会まで。1時間目の授業が始まる前に作者の手で綺麗に黒板が消されていく。そして何事も無かったかのように1時間目の授業が始まっていく。

美術が日常生活に入り込むことで、日常生活が楽しくなったり、身の回りの生活に目を向けさせ、さりげない面白さや美しさに気付いたり、注意深く観察するようになる。淡々と繰り返される日常にリズムを与え、生活にうるおいを与えてくれる。日常と非日常、夢と現実、生と死。人間は常に相反する世界を抱え込み生きている。美術はその異なる世界をつなぐメディアとして存在し、我々に生きる意味を考えさせてくれるのである。